

四国こどもとおとなの医療センター  
小児血液・腫瘍内科医長

今井剛氏

# 香川の医療最前線

607



■いまい・つよし 1994年愛媛大医学部卒。京都大学、倉敷中央病院、愛媛県立中央病院などを経て2022年4月から現職。日本小児血液・がん学会専門医・指導医、日本血液学会専門医、日本小児科学会専門医・指導医。医学博士。奈良県出身。53歳。

15歳以下の子どもに発症する小児がん。子ども1万人に約1人、年間2千〜2500人が診断されているが、医学の進歩に伴って克服例が増え、命さえ助かればという時代から、いかに生きるかを考える時代に移っている。治療から始まり、元の学校へ戻る「復学」に力を注ぐ四国こどもとおとなの医療センター小児血液・腫瘍内科の今井剛医長に現状を聞いた。

のどこからでも発生する。一方で化学療法や放射線療法が効きやすい。外科的治療に化学、放射線を加えた集学的治療によって、70〜80%は生存できるようにな

が起こりやすい。目に見えがんだけを治療するので足りず、全身にあるであろう腫瘍細胞を根絶する必要がある。そのため治療強度は大人より強い。副作用

## 小児がんと復学支援

# 治療後の人生視野に

## 必要な医教連絡の組織

小児がんの特徴は、約3分の1が白血病で、それ以外は固まりを形成する「固形がん」。生活習慣病からなるがんや上皮性のがんは少なく、芽腫と呼ばれる「肉腫」が多いのが特徴だ。小児の固形がんは体

った。大人のがんに比べて入院治療期間が長くなるのも特徴で、半年から1年の入院となる。

も強く出るし、免疫不全状態が長くなり、トータルで入院期間が長くなる。一つらしい体験だ。

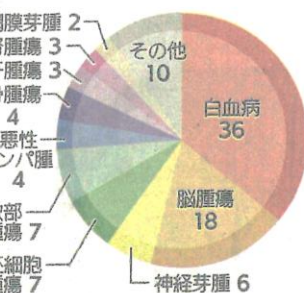
幼稚園児以上には本人にも「治療しなければ負ける病気」という伝え方で告知するが、実は彼らが告知後

「なぜそれほど長く。小児がんでは、明らかなる転移巣がなくても、目に見えない細胞レベルでの播種

保つことは、長期間の治療に向き合う意欲の維持につながる。子どもの半年、1

「院内学級の目的は、「困難を克服する力」や「人と共に生きる力」を養うことだと考えている。治療後の人生は長い。治療したとみられる子どもの中に、小児がん自体、またはその治癒の直接的・間接的な影響によって生じたと考えられる「晩期合併症」が起こることもある。自立して自分の体をきちんとケアする、親に感謝する、そういう力を付けてほしい。そこ

「今後どのような取り組みを考えているか。今後はどのような取り組みを考えているか。



「医教連絡協議会」の発足を目指す。

「医教連絡協議会」の発足を

「医教連絡協議会」の発足を

「医教連絡協議会」の発足を

「医教連絡協議会」の発足を

「医教連絡協議会」の発足を

■ 四国こどもとおとなの医療センター  
小児血液・腫瘍内科

小児血液・がん専門医研修施設で、小児血液・がん専門医・指導医が常勤し、白血病、脳腫瘍、神経芽腫を中心とした小児がんの患者を治療している。小児外科や小児脳神経外科などと協力して化学療法を主体とする集学的治療を行っている。

所在地 善通寺市仙遊町2丁目1の1 電話 0877(62)1000 <https://shikoku-mc.hosp.go.jp/>